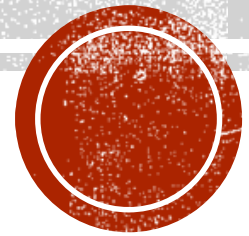


ICT教育における現状と課題

高等教育における反転授業

東洋大学 経済学部教授
現代社会総合研究所所長

澁澤健太郎



能動的学習の必要性

- 能動的学習実施率・・・小学生 約81% 高校生 約49%

(ベネッセ 学習基本調査)

- 454大学がアクティブラーニング導入に前進

(文科省調査「学習調査」2015年)

- 2016年9月から反転学習を導入（東洋大学経済学部）



反転学習

- 授業に先立って講義コンテンツをタブレットなどを通じて視聴させ、教室では知識確認、討論などを盛り込む（反転学習）
- 期待される効果：時間外学習時間の増加、教員とのコミュニケーションの増加、学習の動機付け誘発、見える化による理解度の把握、学力の向上、学力差の解消など
- 課題：システム整備、デバイスの確保、コンテンツ作成に伴う負担、授業デザイン
- => manabaの導入（ToyonetAce）、デバイスの普及（スマートフォン）、**コンテンツ制作と編集（パワーポイントで動画作成可能）**、教室環境の改善
- コンテンツ制作における課題
- 文系科目の多くは共通のテキストがないために担当教員が独自で、コンテンツを制作する必要が生じる、他者のコンテンツ利用は著作権上多くの課題が抽出、市販ビデオ教材は、自分の教授法との違いや内容との整合性が得られないことが多い



教材コンテンツ作成と環境整備

- 武雄市の事例：教科が好きになる、学校が楽しくなる、理解度が高くなる
 - 成功したポイント：担当教員がコンテンツ制作企業に多くの注文を付けたこと、教室の定員と規模⇒示唆することは教員自らが授業デザインを反転学習にあわせて作ること+対応可能な教室環境の整備
- * 本来少人数制教育の重要性は散々言われてきたこと
- 大学の場合、大教室が多くなり中小教室でも机は固定型で能動的学習に向かない
 - 白山校舎・・・教室数 172 （特別教室、会議室などは除く）あるが、能動的学習に対応する教室は2教室



能動的学習のための環境

